Hiroshima Shudo University

チンギス・カン前半生研究のための『元朝秘史』と『集史』の比較考察

宇　野　伸　浩

（受付　2008 年 10 月 31 日）

目　　次

1. はじめに
2. 史料の利用から見たチンギス・カン研究の概略
3. チンギス・カン家の養子
4. テブ・テンゲリ殺害事件
5. チンギス・カンの第一次即位
6. おわりに

1. は　じ　め　に

近年のチンギス・カン研究は，2006年のモンゴル帝国建国800周年記念事業がひとつの契機となって発展し，世界で多くのチンギス・カンを扱った著書が出版された。筆者が気付いた主なものだけでも，Thomas Allsen 1994，İsenbike Togan 1998，白石典之 2001，白石典之 2002，余大鈞 2002，George Lane 2004，John Man 2004（邦訳マン 2006），Jack Weatherford 2004（邦訳ウェザーフォード 2006），白石典之 2006，佐藤正衞 2006，Michal Biran 2007 がある。この中で，白石典之氏の研究は考古学資料に基づく独自のものであり，考古学資料と歴史資料の接点において飛躍的に研究が進み，とくにモンゴル帝国における鉄生産，チンギス・カンの宮廷という視点から質の高い研究が進みつつある[1)]。

一方，史料に基づいた分析の点では，多くの著書が出た割には，一進一退の状況にあり，とくに即位までのチンギス・カン前半生の研究については，『元朝秘史』と『集史』の利用の点で十分な史料批判が行われておらず，筆者の観点から見ると，『元朝秘史』に依拠しすぎた研究が多い。研究書とは言えないかもしれないが，John Man 2004，Jack Weatherford 2004，佐藤正衞 2006 は，全面的に『元朝秘史』に依拠したチンギス・カン伝であり，研究者によるこれまで史料研究の蓄積を無視したものである。1980年代に刊行された Paul

1）本稿は，科学研究費補助金研究成果報告書である松田孝一（編）2008 に掲載した宇野伸浩 2008 を，一部修正したものである。

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

Ratchnevsky 1983，岡田英弘 1986 は『元朝秘史』をある程度批判的に利用している点で価値のあるものであるが，やはり『元朝秘史』に依拠したチンギス・カン伝であることは否めない。杉山正明氏が，『集史』をはじめとするペルシア語史料をきちんと利用した本格的なチンギス・カン伝はいまだ書かれていないという趣旨の指摘をされているが[2)]，筆者もその通りであると考えている。

そこで，本稿の目的は，チンギス・カン研究に関わる 2，3 のトピックを取り上げ，その中で『元朝秘史』と『集史』の記述の違いを比較することにより，史料批判に基づくチンギス・カン研究をどのように行うことができるかを試みてみたい[3)]。

2. 史料の利用から見たチンギス・カン研究の概略

最初に，史料の利用方法，とくに『元朝秘史』をどのように利用したかという観点から，チンギス・カン研究の流れを簡単に整理しておきたい。

19世紀後半から中国とロシアで『元朝秘史』の研究が始まり，20世紀になって『元朝秘史』のモンゴル語部分の研究・翻訳が本格化し，チンギス・カン研究の根本史料として利用されるようになった。その結果，チンギス・カン研究は『元朝秘史』に全面的に依拠し，他の史料を付随的に利用する方向に変わった。そのようなチンギス・カン研究をもとに書かれた代表的なチンギス・カン伝として，ウラジーミルツォフ，ルネ・グルッセ，小林高四郎，ルイ・アンビス，レオ・デ・ハルトフによるチンギス・カン伝がある[4)]。

しかし，1968年に吉田順一氏が『元朝秘史』『集史』『聖武親征録』『元史』の比較研究から『元朝秘史』の年代記としての信憑性に疑問を呈する研究を発表したことが重要な転機となり，その後，吉田順一氏は，『元朝秘史』の記述を 1 つの伝承として他の史料と詳細に比較検討するチンギス・カン研究・『元朝秘史』研究の論文を発表した[5)]。岡田英弘氏は，『元朝秘史』の年代記としての信憑性を疑問視することに賛同し，『元朝秘史』のフィクション性を強く主張する研究を発表するとともに，その立場から『元朝秘史』を批判的に利用したチンギス・カン伝を刊行した[6)]。欧米では，Ratchnevsky が『元朝秘史』と『集史』の慎重な

2） 杉山正明 2005，pp. 384–385；杉山正明 2008，pp. 116–118.
3） 本稿で述べる筆者の考えの一部は，一般向きに書かれた宇野伸浩 1991, シンポジウム報告である宇野伸浩 1993 の中で述べたことがある。
4） Владимирцов 1922，邦訳ウラジーミルツォフ1942；Grousset 1944，邦訳グルッセ1967；小林高四郎 1960；Hambis 1973，邦訳アンビス 1974；de Hartog 1989，邦訳ハルトフ 1991.
5） 吉田順一 1968，吉田順一 1986，Yoshida Jun’ichi 1992，吉田順一 1993，吉田順一 1996．吉田順一 2005 にこれらの論文のモンゴル語訳が収録されている。
6） Okada Hidehiro 1969，岡田英弘 1970，岡田英弘 1971，Okada Hidehiro 1972，岡田英弘 1981，岡田英弘 1986.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

比較研究に基づくシギ・クトゥク研究を行っており，これが早い時期に『元朝秘史』の記述を疑問視したすぐれた研究である。ただ，その後発表された Ratchnevsky のチンギス・カン伝は，『元朝秘史』と『集史』を利用しながら，かなり『元朝秘史』に依拠したものである[7)]。1990年代に刊行されたモーガン，杉山正明氏の著書は，『集史』などのイスラーム史料を本格的に利用したモンゴル帝国史であるが，チンギス・カンについては，即位以後に焦点が当てられ，即位以前のチンギス・カンについてはあえて深く踏み込まないという立場で書かれている[8)]。

筆者は，チンギス・カン研究において『元朝秘史』の利用は慎重であるべきだとする研究者の立場に賛成であり，『元朝秘史』は何らかの史実に基づいて書かれているとはいえ，極めて多くの点で意図的に改変・脚色がなされており，『元朝秘史』と『集史』『聖武親征録』『元史』の間で記述の相違があるとき，ほとんどの場合，史実を記しているのは『集史』『聖武親征録』『元史』である可能性が高いと考えている。しかし，その判断は微妙な場合もあり，以下に具体的な例をあげて，どのように判断できるかを示してみたい。

3. チンギス・カン家の養子

最初の具体的な例として，チンギス・カン[9)]に拾われた養子の事例を取り上げてみたい。『元朝秘史』[10)]には，チンギス・カンとの戦いに敗れた部族の男の子が拾われてきて，チンギス・カンの母親のホエルン・エケに育てられるという話が繰り返し出て来る。

まず，114節には，チンギス・カンがメルキト族を破り，妻のボルテ・フジンを救いだした時，ウドゥイト・メルキト族 Uduyit Merkit が敗走した後のキャンプ地に取り残されていたクチュ Küčü という五歳の男の子が兵士に拾われてきて，ホエルン・エケに贈り物として与えられたという話がある。

また，119節には，チンギス・カンとジャムカの間に亀裂が生じて互いに別れたとき，タイチウト族がジャムカの側に移って行き，そのタイチウト族の中のベスト族 Besüd のキャンプ地に取り残されたココチュ Küköčü という名の男の子が拾われてきて，ホエルン・エケに育てられたという話がある。

7） Ratchnevsky 1965，英訳 Ratchnevsky 1993；Ratchnevsky 1983，英訳 Ratchnevsky 1991.
8） Morgan 1986，邦訳モーガン 1993；杉山正明 1992；杉山正明 1997.
9） 厳密な表記を行うならば，1206年の即位以前は「テムジン」，即位以後は「チンギス・カン」とすべきであるが，本稿では即位前後の時期にまたがって議論し，二つを区別すると煩雑になるため，基本的に「チンギス・カン」を使用することにする。
10） 『元朝秘史』は様々な訳注があるが，ここでは基本的に小沢重男氏の訳注の解釈に従い，日本語訳は小沢重男 1986，小沢重男 1987 の逐語訳に基づいて作成した。ローマナイズは，栗林均・确精扎布（編）2001 に基づいた。

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

さらに，135節に，チンギス・カンが，金の完顔丞相，ケレイトのオン・カンと協力してタタル族を破ったとき[11]，タタル族のキャンプ地に捨てられていた男の子が兵士に拾われ，チンギス・カンがその子を母ホエルン・エケに贈り物だと言って与えると，ホエルン・エケが五人の自分の子の弟，すなわち六番目の子供として，シギケン・クドゥク Šikiken Quduqu[12] と名づけて育てたという話がある。

137節には，チンギス・カンがジュルキン族を破ったとき，ジュルキン族に仕えていたジャライル族のジェブケ Jebke が，ジュルキン族のキャンプ地からフウシン族出身のボロウル Boro'ul という名の男の子を拾ってきて，ホエルン・エケに会って与えたという話がある。

以上の４つの話のまとめとして，『元朝秘史』138節には，次のように述べられている。

> ホエルン母は，メルキト族の居営地から見つけられたグチュ Güčü という名の子供を，タイチウト族の中のベスト Besüd 族の居営地から見つけられたココチュ Kököčü という名の子供を，タタル族の居営地から見つけられたシギケン・クトゥク Šigiken Qutuqu という名の子供を，ジュルキン族の居営地から見つけられたボロウル Boro'ul という名の子供を，これ等四人をゲルのなかで養うのに，ホエルン母は「子供達のために，昼は見ることの目に，夜は聞くことの耳に，誰をするべきか」と言ってゲルの中で養った[13]。

かつてこれらの『元朝秘史』の記述が史実と考えられたこともあったが，現在では Ratchnevsky の研究により，史実とかなり異なることが論証されている[14]。Ratchnevsky によれば，この繰り返されるモチーフは「文学的な仕掛け」であり，４つの話の中で唯一『集史』に対応する記事があるシギ・クトゥクの話は，両者の間でストーリーにかなり相違があり，Ratchnevsky は『集史』の記事の方が史実であると結論している[15]。その『集史』の記事を次にあげてみよう。

> チンギス・カンの時代に，彼と彼のカトンたちが育て，信頼されアミールとなったタタル族の子供たちの中の一人は，クトゥク・ノヤン Qūtūqū Nūyān である。彼はシギ・ク

11） この戦いについては，近年，白石典之，松田孝一の両氏が，現地調査の成果も踏まえて詳しく考察している。白石典之 2006，pp. 40–49，松田孝一 2006，pp. 28–46 参照。
12） 『元朝秘史』の他の箇所には，「シギケン・クトゥク Šigiken Qutuqu」「シギ・クトゥク Šigi Qutuqu」とある。
13） 小沢重男 1986, p. 97.
14） Ratchnevsky 1965, Ratchnevsky 1993 に優れた分析があるにもかかわらず，シギ・クトゥクはチンギス・カンの弟（あるいは弟か息子）として育てられたとする文献が多い。例えば，Morgan 1986, pp. 57, 97；Togan 1998, p. 145；余大鈞 2002, p. 85；ウェザーフォード 2006, p. 140；Biran 2007, p. 44.
15） Ratchnevsky 1993, pp. 75–77.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

トゥク Šīkī Qūtūqū とも呼ばれた。彼には次のような話がある。タタル族を略奪したとき，チンギス・カンにはまだ子供がおらず，彼の第一カトンのボルテ・フジン Būrte Ūjīn は子供を欲しがっていた。チンギス・カンは突然，道に捨てられている子供を見つけた。彼を拾い上げ，ボルテ・フジン Būrte Ūjīn のところへ連れて行って「あなたはいつも子供を欲しがっていたのだから，この子を息子として育て見守りなさい」と言った。カトンは彼を実の息子のように自分のそばで非常に大事に育てた。彼は大きくなったときシギ・クトゥクと呼ばれ，クトゥク・ノヤンとも呼ばれた。彼はチンギス・カンを「エチゲ Īče[16]」すなわち父と呼び，ボルテ・フジンを「ベリゲン・エケ Berikān Īke」と呼んでいた。（『集史』部族編タタル族の項，Rašīd/Али-заде 1-1, pp. 178–179; Rašīd/Majlis 2294, fol. 18a–18b）

『元朝秘史』と『集史』の記述に見られる大きな相違は，一つはシギ・クトゥクを養子にした時期であり，もう一つは，シギ・クトゥクを育てた養母が誰であるかである。Ratchnevsky はどちらの点でも『集史』の記事が史実を伝えているとみなした。その根拠は，次の 3 点である。(1)『元朝秘史』においてシギ・クトゥクが拾われてきたとされるタタル族との戦いは1196年の 5 － 6 月であり，そのときにシギ・クトゥクが子供であるならば，10年後の1206年にシギ・クトゥクが千人隊長や断事官になることはありえない。(2) シギ・クトゥクの養母は，『元朝秘史』ではホエルン・エケであり，『集史』ではボルテである。『元朝秘史』に従うと，チンギス・カンとシギ・クトゥクの兄弟の間で20－30歳の年齢差が生じることになり，事実とはみなしがたい。(3)『集史』に述べられているように，ボルテに子供がいないためにシギ・クトゥクを養子にしたならば，その時期は，長男ジョチの誕生（遅くても1184年）より前，さらには，ボルテがメルキト族に捕らえられ妊娠したとき（1180年以後）より前のはずであり，シギ・クトゥクが1180年ごろに生れ，2 － 3 歳で養子になったと考えれば他の記述との間で矛盾は生じない。

Ratchnevsky は言及していないが，『集史』は，シギ・クトゥクがアリク・ブケの乱の時（1260－64年）に82歳で死去したと記しており[17]，それに従うならば1179年から1183年の間に生まれたはずであるので，この点からも Ratchnevsky の主張は正しいことが分かる。

一方，ボロウルについては，『元朝秘史』以外の史料に拾い子であったことを示す記事は

16） Rašīd/Majlis 2294, fol. 18b の該当箇所の綴りは AYČH であり，Īče としか読めないが，おそらく AYČKH の K が脱落したのであろう。AYČKH であれば「エチゲ Īčike」と読める。

17） 「シギ・クトゥクはチンギス・カンの死後も生きており，オゴデイ・カアンは彼を兄と呼んでいた。彼は彼の息子たちとともに，モンケ・カアンより上座に座った。彼はトルイ・カンとソルカクタニ・ベキに仕え，アリク・ブケの乱のときに死去した。彼の息子たちの一人が（クビライ・）カアンのもとにいる。（亡くなった時）82歳であった。」（『集史』部族編タタル族の項，Rašīd/Али-заде 1-1, pp. 179–180）

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

ない。その上，『元朝秘史』の記述にいくつかの矛盾があることが指摘されている。例えば，ボロウルは，『元朝秘史』137節では1197年ごろチンギス・カンがジュルキン族を破ったときに拾われたことになっているが，163節ではその2，3年後であるにもかかわらずナイマン族との戦いに出陣している。つまり，ジュルキン族を破ったときに子供であったとする『元朝秘史』の記述は，つじつまが合わないのである[18)]。

さらに，クチュとココチュについては，拾い子であったことを示す史料が『元朝秘史』以外にないばかりでなく，クチュとココチュに関する史料自体がほとんどない。以上より，『元朝秘史』に出て来る拾い子を養子にした話はどれも信憑性に欠けるのである。

こうしてみると，おそらくこれらの拾い子を養子にした話のもとは一つであって，シギ・クトゥクが拾われてボルテに育てられたという話から，いくつもの拾い子の話が生まれ，チンギス・カンが滅ぼしたタタル族，ジュルキン族，メルキト族，タイチウト族のどの部族からも子供を拾ってホエルン・エケが育てたという『元朝秘史』のストーリーが出来上がったのであろう。

以上の分析から，『元朝秘史』の脚色にはある傾向があることが見えてくる。『元朝秘史』の話は完全なフィクションではなく何らかの事実をもとにしており，ひとつの小さな事実に脚色を加えてふくらませながら，巧みなストーリーに作りあげているのである。

では，どのような意図で脚色が加えられたのであろうか。『元朝秘史』の養子のストーリーは，チンギス・カンが敵対した部族の子供（あるいはその部族の配下の部族の子供）でも殺さずに自分の家族に加えて育てさせ，その子がのちにチンギス・カンの家来として活躍しチンギス・カンを支えるという恩返しの美談になっており，チンギス・カンが敵の子供であっても温情をかける人物であったことを示す内容になっている。つまり，これらの脚色の意図は，チンギス・カンのイメージ・アップにあるとみてよいであろう。

ところが，次の『集史』の記事に記されている事実は，脚色の結果生じたイメージとは逆にチンギス・カンの情け容赦ない非情な側面を示している。1200年以降，チンギス・カンは数回にわたってタタル族を破り，多くのタタル族を捕虜にした。そのとき，チンギス・カンはタタル族の子孫を根絶やしにするよう命じたのである。

> 彼ら（タタル族）は，チンギス・カンと彼の先祖の殺人者・敵であったため，彼（チンギス・カン）は，彼らを完全に殺害しひとりも生かしておかないように命じ，「女どもも子供たちも殺すように。完全に滅びるように，妊婦の腹を割くように。反抗や反乱のもとであり，チンギス・カンの親族の諸部族から多くの者が殺されたのだから。」とい

18） Pelliot et Hambis 1951, pp. 372–378；村上正二 1970, p. 310.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

うヤサク yāsāq を命じるに至った。誰にもその部族を守ったり彼らを隠したりするチャンスはなかった。彼らの中から生き残った何人かの人たちは，自分が生き残ったことを知らせた。ところで，チンギス・カンの治世の初期に，またその後にも，モンゴル族とモンゴル族以外の部族もタタル族から娘を自分と自分の一族のために娶り，彼らにも与えた。チンギス・カンも彼らから娘を娶ったので，彼のカトンの中でイスルン Yīsūlūn とイスカト Yīsūkāt はタタル族出身である。チンギス・カンの年上の弟であるジョチ・カサル Jūjī Qasār もカトンを彼らから娶った。大アミールたちも彼らの娘を娶っていた。そのため，彼らはタタル族の何人かの幼児をこっそり隠した。チンギス・カンはタタル族から1千人をジョチ・カサルに託して殺すように命じた。彼は，自分のカトンの意見ととりなしによって，全体のうち500人を殺し，500人を隠した。その後，チンギス・カンがそのことを知ると，ジョチ・カサルに対して怒っておっしゃった『ジョチ・カサルの罪の中の一つはこれである。彼には他に一，二の罪がある』と。これについては彼の物語の中で説明されるだろう。チンギス・カンがタタル族に対して怒り彼らを滅亡させた後に，少数の人々があちこちにそれぞれの理由で生き残った。彼らが隠した幼児は，オルドやタタル族出身のアミールたち，カトンたちの家で育てられた。殺されなかった妊婦たちからは子供が生まれた。」（『集史』部族編タタル族の項，Rašīd/Али-заде 1-1, pp. 175–177; Rašīd/Majlis 2294, fol. 18a）

これに対応する記事が『元朝秘史』154節にあり，そこでは

昔日よりタタル族の人衆は祖父達・父達を殺したのだ。祖父達・父達の讐みを報じ，仇をとって，車轄に比べて殺し殺してしまおう。死に絶えるまで殺戮しよう。残った者達を奴隷にしよう。方々に分け合おう[19]。

とあるように，チンギス・カンが一族と話し合って，特定の者のみを処刑の対象とすることに決めたことになっている。「車轄に比べて殺し殺してしまおう či’ün-dür ülijü kiduǰu alaǰu ögüye」の či’ün-dür ülijü kidu- は，従来「身長が車轄ほどに達しているものを殺す」の意味であるとされており[20]，一定の以上の身長の大人のみを殺し，子供は対象から外したと解釈されてきた。さらに，チンギス・カン一族がタタル族の女性を娶っていることから，大人のうち女性は対象から外され，成人男子のみが対象になったと解釈されている[21]。そうであれ

19） 小沢重男 1986, p. 239.
20） 小沢重男 1986, p. 243.
21） 村上正二 1972, pp. 51, 60.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

ば，上掲の『集史』の記事と大きく食い違うことになる。両者を比較した余大鈞は，『元朝秘史』を史実と考えるべきだと結論した[22)]。他にもこの『元朝秘史』の記述を史実とするチンギス・カン伝は多い[23)]。

しかし，『集史』の記事を否定する積極的な根拠はなく，前述の拾い子の話の創作と合わせて考えるならば，『元朝秘史』の作者は，チンギス・カンのイメージ・ダウンを避けるために，事実を脚色したと考える方が合理的である。すなわち，『元朝秘史』の作者は，チンギス・カンがタタル族の子供さえも殺すように命じたという事実をカモフラージュするために，一定の身長以上の者のみを殺したという話に改変し，さらに，チンギス・カンの結婚直後の若い時の拾い子の事件を，諸部族を滅ぼした頃の事件へと時期を後に移動し，さらにタタル族以外の部族の子供も拾い育てさせたという話を付け加えることによって，チンギス・カンの非情な側面を隠そうとしたのであろう。その結果，『元朝秘史』のストーリーは，みごとに逆のイメージを与える物語へと作り変えられたのである。

4. テブ・テンゲリ殺害事件

次に，即位直後のことになるが，コンゴタン族出身のシャーマンであるテブ・テンゲリの殺害事件を取り上げてみたい。チンギス・カン即位後に起きたテブ・テンゲリ殺害は有名な事件であり，多くのチンギス・カン研究において言及されてきた。これまでの研究が依拠してきた史料は，主として『元朝秘史』244－245節である。『元朝秘史』を批判的に利用している岡田英弘氏と Ratchnevsky も，この事件については『元朝秘史』の話に依拠して詳しい解説をしている[24)]。また，近年の Allsen，余大鈞，Lane，Biran の研究においても『元朝秘史』のストーリーを史実とみなす立場からこの事件を解説している[25)]。ところが，『集史』部族編オロナウト族の項にもこのテブ・テンゲリ殺害事件が記されており，そこでは，重要な点において『元朝秘史』と異なるストーリーが語られているのである。

両者を比較するために，まず，『元朝秘史』244－245節の概略をまとめておきたい。

> テブ・テンゲリ Teb Tenggeri ら 7 人の兄弟がカサル Qasar を集団で殴ったため，カサルがチンギス・カンに訴えたが，チンギス・カンは聞く耳を持たなかった。逆にチンギ

22） 余大鈞 2002, p. 97.
23） Ratchnevsky 1991, p. 67；Allsen 1994, p. 340；Biran 2007, p . 37；佐藤正衛 2006, p. 230；ウェザーフォード 2006, p. 114.
24） Ratchnevsky 1991, pp. 98–101；岡田英弘 1986, pp. 109–113.
25） Allsen 1994, p. 343, note 27；余大鈞 2002, pp. 196–201；Lane 2006, pp. 182–183；Biran 2007, pp. 44–45.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

ス・カンはテブ・テンゲリの中傷を真に受け，カサルを捕らえようとしたが，母ホエルンに反対され，ひそかにカサルの民を奪った。その後，テブ・テンゲリのもとに人々が集まるようになり，末弟テムゲ・オッチギン Temüge Otčigin の民がテブ・テンゲリのもとへ去ったため，テムゲ・オッチギンは，使者を遣わして取り戻そうとしたが，使者は打たれて追い返された。次にテムゲ・オッチギン自身が取り戻しに行ったが，屈辱を受けて追い返された。この事件をチンギス・カンに訴えると，聞いていたボルテが泣いて悲しんだ。それを聞いて，チンギス・カンは，テムゲ・オッチギンにテブ・テンゲリに対して何らかの対処を行うように命じた。テブ・テンゲリたちがこれからチンギス・カンの天幕にやって来るため，テムゲ・オッチギンは 3 人の力士を外に待機させた。テブ・テンゲリが，父や兄弟とともにやって来ると，テムゲ・オッチギンは，テブ・テンゲリに相撲の勝負を挑んだ。チンギス・カンが外で勝負をするように言い，テムゲ・オッチギンはテブ・テンゲリを外に引きずり出し，外に待機していた 3 人の力士にテブ・テンゲリの背中をへし折って殺害させた。チンギス・カンは，テブ・テンゲリの遺体に小さな天幕をかぶせさせ移営した。

次に，『集史』部族編オロナウト族の項に記されているテブ・テンゲリ殺害事件の話を引用する。少し長くなるが，関係箇所全文を引用してみたい。

一番目の息子コンゴタン Qūnkqutān。この語の意味は「大鼻」である。彼がそうであったので，そのためにこの名がつけられた。彼の子孫から大アミールたちが出た。チンギス・カンの時代にいたモンリク・エチゲ Munklīk Īčike は，彼の子孫であった。オン・カン Ūnk ẖān が策略を用い，娘をチンギス・カンの息子に与えるという口実をもうけて，チンギス・カンに息子を連れて自分のもとに来るように求めた。チンギス・カンは，途中で，モンリク・エチゲの家に下馬し，彼に相談した。彼はチンギス・カンを引きとめ，オン・カンのもとに行かせなかった。彼は，困難なときも安楽なときも，恐ろしいときも希望があるときも，いつもチンギス・カンの味方であった。チンギス・カンは自分の母ホエルン・エケ Ūālūn Īke を彼に与え，彼を全アミールたちの上座，すなわちチンギス・カンの隣に右手に座らせた。彼にはココチュ Kūkujū という名の息子がおり，モンゴル人は彼をテブ・テンゲリ Teb Tenkerī と呼んでいた。彼は常に目に見えない世界や未来のことを伝え，「神が私と話をし，私は天に昇ります」と話していた。彼はチンギス・カンの前に来るたびに，「神は汝が世界の帝王になるだろうとおしゃっている」と言った。「チンギス・カン」の称号を与えたのは彼であり，「神の命令により，汝の名はこのようでなければならない」と言った。モンゴル語で「チンク čīnk」は「強固な」と

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

いう意味であり，「チンギス čīnkkīz」はその複数形である。この称号を採った理由は，以下のとおりである。当時カラ・キタイ Qarā Ḫitāyの大帝王の称号は「グル・カン kūr ḫān」であり，グル kūr の意味も同じく「強固な」であり，王が非常に強大でないかぎり，グル・カン kūr ḫān と呼ばれなかった。モンゴル語で「チンギス čīnkkīz」は「グル」と同じ意味を持つが，より大げさで，複数形でもあるため，この語をつけることは，例えばペルシア語でシャハンシャー šahanšāh（王の中の王）と言うのと同じであった。テブ・テンゲリは，真冬に，その地方で最も寒い所であるオノン Ūnān 河，ケルレン Kelūrān 河の地で，裸で氷水の中に座るのが習慣となっていた。彼の体温で氷が溶け，その水から蒸気が上がった。モンゴル人の民衆の間で個々のモンゴル人が話して有名になったことは，彼が灰色の馬に乗って天に昇るということである。この話は民衆の話にありがちな誇張・嘘であるが，彼の言葉には欺瞞と偽りがあった。彼は，チンギス・カンに対して失礼なことを言ったが，温和な性格のところもあり，チンギス・カンの助けになることもあったので，チンギス・カンに気に入られていた。その後，彼はどんな話題にでも池ほどの多くのことを言い，高慢であり傲慢であったので，チンギス・カンは，最高の聡明さによって，彼がペテンであり偽善的であることに気がついた。

ある日，チンギス・カンは，自分の弟のジョチ・カサル Jūjī Qasār に，決意して，「彼がオルドにやって来て，失礼なことを始めるや否や，殺すように」と命じた。ジョチ・カサルは，非常に力の強い勇者であり，人を両手でつかんで，その人の背を細い棒のようにへし折るほどであった。ついに，テブ・テンゲリがやって来て，失礼なことを始めたので，ジョチ・カサルは，彼を二，三度足で蹴り，オルドから外に投げ出して殺した。彼の父は，自分の場所に座っていて，彼の帽子を拾い上げた。よもや息子が殺されるとは思っていなかったが，彼が殺されても黙ったままだった。（『集史』部族編オロナウト族の項，Rašīd/Али-заде 1-1, pp. 417–422; Rašīd/Majlis 2294, fol. 33b–34a）

以下に両史料の主要な相違点をまとめておこう。

（1）『元朝秘史』では，殺害したのはテムゲ・オッチギンの部下の 3 人の力士であるが，『集史』ではジョチ・カサルである。

（2）『元朝秘史』では，チンギス・カンがテブ・テンゲリに対して何らかの対処をするように命じただけだが，『集史』ではチンギス・カンが殺害を命じている。

（3）『元朝秘史』では，ジョチ・カサルとテブ・テンゲリ，テムゲ・オッチギンとテブ・テンゲリの対立が殺害の原因だが，『集史』ではチンギス・カンとテブ・テンゲリの対立が殺害の原因である。

これらの相違点は，テブ・テンゲリの父モンリク・エチゲに関する『元朝秘史』と『集史』

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

の相違と実は連動している可能性がある。モンリク・エチゲに関する両史料間の相違を次にまとめてみたい。

（1）『元朝秘史』では，テブ・テンゲリの父モンリク・エチゲは，チンギス・カンの父イェスゲイ・バアトルに仕えたチャラカ・エブゲンの息子であり，イェスゲイ・バアトルは，死ぬ時にモンリクにテムジンたち残される家族の世話を頼んだことになっている。一方，『集史』では，チャラカ・エブゲンとモンリク・エチゲは親子ではない。部族編オロナウト族の中のコンゴタン族の箇所に，チャラカ・エブゲンには Ālan Temūr，Māyjū，Masu‘ūd の 3 人の息子がいたとあるが，モンリク・エチゲが息子だとは記していない[26]。『集史』には，イェスゲイ・バアトルが死に際にモンリク・エチゲに家族の世話を頼んだという話はなく，モンリク・エチゲが『集史』チンギス・カン紀に最初に登場するのは，上掲の史料の前半に書かれている事件，すなわち1203年に，オン・カンが縁談を口実にチンギス・カンを呼び寄せる策略に出たとき，モンリク・エチゲが引きとめて救った事件である。

（2）『元朝秘史』にホエルンの再婚に関する話はないが，『集史』では，モンリク・エチゲがチンギス・カンの母ホエルン・エケの再婚相手であったことが，上掲の史料以外に，『集史』チンギス・カン紀の Tūlūn Čerbī の千人隊の記事にも明確に述べられている[27]。

つまり，モンリクがなぜ「エチゲ（父）」と呼ばれたかという点について両史料は異なる理由をあげているのであり，『元朝秘史』はイェスゲイ・バアトルが残される家族の世話をモンリクに依頼したことが理由であり，『集史』はホエルンがモンリクと再婚したことが理由となっているのである。

次に，『集史』と『元朝秘史』が一致する点を確認しておきたい。1203年オン・カンが縁談を口実にチンギス・カンを呼び寄せる策略に出た時，モンリク・エチゲが引きとめた話は，『元朝秘史』168節にもほぼ同じ内容が記されており，両史料が一致する点である。つまり，チンギス・カンはオン・カンとの決裂という最大の危機において，モンリク・エチゲのお陰で救われたという点は両史料が一致している。また，モンリクが「エチゲ」と呼ばれていたことも共通している。テブ・テンゲリ殺害については，チンギス・カンの弟が殺害にかかわっているという点，テブ・テンゲリが宮廷で殺害されたという点で両史料は一致している。

相違点，一致点を総合して考えると，次のように考えることがもっとも合理的に両者の相違を説明できると思われる。『元朝秘史』の作者は，ホエルン・エケがモンリクと再婚した事実を隠そうとしたが，「モンリク・エチゲ」と呼ばれた理由を説明するために，イェスゲ

26）『集史』部族編オロナウト族の項，Rašīd/Али-заде 1-1, p. 424.

27）Rašīd/Узбекистан 1620, fol. 100a; Rašīd/Rawšan, p. 595. モンリク・エチゲがホエルン・エケの再婚相手であることは，かつて小林高四郎氏によって否定されたことがあったが，現在は肯定されている。小林高四郎 1936；北川誠一 1984, p. 48，注14参照。

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

イ・バアトルが残される家族の世話をモンリクに頼んだという話を創作した。また，その話をもっともらしくするため，モンリクをイェスゲイ・バアトルの家臣で同じコンゴタン族出身であったチャラカ・エブゲンの息子であることにした。テブ・テンゲリ殺害については，『元朝秘史』はチンギス・カンの関与が極力少なく見えるようなストーリーになっており，テブ・テンゲリがテムゲ・オッチギンとの対立の末に，彼の部下の力士に殺されたことになっている。おそらく，チンギス・カンの関与という点では事実は逆であり，『集史』が記すように，チンギス・カン自身が対立しているテブ・テンゲリの殺害を命じ，ジョチ・カサルが実行したというのが真相である可能性が高い。そして，以上の二つをあわせて考えると，『元朝秘史』の作者が最も隠したかった事実は，チンギス・カン自身が母の再婚相手の息子，すなわち義理の弟の殺害を命じたことである。これも前章の拾い子の話の創作と同様，チンギス・カンのイメージ・ダウンを避けるための改変・脚色であろう。

5. チンギス・カンの第一次即位

前章までの分析によれば，『元朝秘史』と『集史』の間で相違があった場合，常に『元朝秘史』の方が意図的に脚色されており，『集史』が史実を示していると考えてよさそうに見えるが，もう少し複雑な事例がある。その事例として，いわゆる「チンギス・カンの第一次即位」に関する両史料の相違の問題を取り上げてみたい。

『元朝秘史』では，124節にテムジンがチンギス・カンとなった話，いわゆる「チンギス・カンの第一次即位」の話が登場する。キヤト族のメンバーであるクトゥラ・カンの息子アルタン，ネクン・タイシの息子クチャル，ソルカクトゥ・ユルキの息子サチャ・ベキが，テムジンをチンギス・カンと名付けてカンに選出したと記されている。事件の順序としては，ジャムカとテムジンの決裂の後，十三翼の戦いの前である。『集史』『聖武親聖録』には，十三翼の戦いは記されているが，その前にテムジンをカンに選出したことを記した記事はない。

Ratchnevsky，Allsen，Togan，余大鈞，Lane，Biran をはじめとする大部分の研究者は，このとき「チンギス・カン」となったとする『元朝秘史』の記述は誤りだが，テムジンを「カン」に選出した事件自体は『元朝秘史』に従って史実であると考えている[28)]。それに対して，岡田英弘氏は，第一次即位自体がなかったという説を主張した。その根拠は，二度の即位を語っている史料が『元朝秘史』以外にないことである。岡田氏は，『元朝秘史』に二度の即位が語られている理由としては，本来『元朝秘史』は1206年の即位までを語るのを目的としており，その場合ほとんど全篇を通じて本名の「テムジン」で呼び捨てにすることになるた

28） Ratchnevsky 1991, pp. 42–43；Allsen 1994, p. 336；Togan 1998, p. 171；余大鈞 2002, pp. 76–77；Lane 2004, pp. 22–23；Biran 2007, p. 35.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

め，それを防ぐためにジャムカとの対立の発端のところに第 1 回目の即位があったという話が発明されたと考えた[29]。

前章までに分析した事例は，『元朝秘史』と『集史』が食い違った場合，『元朝秘史』側に意図的な改変があることが多いことを示しており，それに従えば，この事例でも，『元朝秘史』の記述の信憑性を疑った方がよさそうに見える。しかし，関連記事を調べてみると，『集史』『元史』『聖武親征録』にも，第一次即位の実在性を証明する記述があることを確認することができる。それは，1203年にチンギス・カンとオン・カンが敵対した時に，チンギス・カンが送った問責の辞の中にある。まず『元朝秘史』179節の文をあげてみたい。

> チンギス可汗は「アルタン Altan，クチャル Qučar 二人に言え」と云って言うに「お前たち二人は私を見限り，『公然と棄てよう』と云ったのか，お前たちは。『隠れて棄てよう』と言ったのか，お前たちは。クチャルをお前を『ネクン太子 Nekün taisi の子だ』と云って我々から『お前が汗になれ』と云ったら肯んじなかったぞ，お前は。アルタンをお前を『クトゥラ汗 Qutula qan がしろしめしていた。父がしろしめしていたので，お前が汗になれ』と云ったら，肯んじなかったぞ，お前は。上より『バルタン・バアトル Bartan ba’atur の子だ』と云って，サチャ Sača，タイチュ Taiču 二人に『お前たちが汗になれ』と云ってことわられたぞ，私は。『お前たちが汗になれ』と云ってことわられて，お前たちに『お前が汗になれ』と云われて治めて行ったのだ，私は。お前たちが汗になったならば，多くの敵に前哨として奔らせられれば，天に加護されれば，敵人を掠襲する時に，頬美しい娘・婦人・女を，尻ぶりのよい去勢馬を連れて来て与えたのだぞ，私は。逃げまどう獣にさきがけさせられれば，岩山の獣を前脚をひとまとめにして与えたのだぞ，私は。山崖の獣を後脚をひとまとめにして与えたのだぞ，私は。草原の獣を腹をひとまとめにして与えたのだぞ，私は。今，汗なる父によくよく伴となってくれ。『あきっぽい』と云われないようにお前たちは。「チャウド・クリ ča’ut Quri の支えられものだった」と云わせるのではないぞ。三河の源に誰も下営させるのではないぞ」と云って遣わした[30]。

これは，チンギス・カンがアルタンとクチャルに送った問責の辞であるが，その中で述べられている状況は，アルタン，クチャル，サチャ，タイチュに推されてテムジンがカンになったことを述べていることから見て，123節の第一次即位の場面であることは間違いない。そして，この問責の辞は，『集史』『元史』『聖武親征録』にも対応する記事があるのである。

29） 岡田英弘 1986，pp. 60–61.
30） 小沢重男 1987，pp. 142–146.

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

表現は少しずつ異なるが，内容はほぼ『元朝秘史』の記事と一致している。長くなるが，以下に引用しよう。

チンギス・カンが別にアルタン Altān とクチャル Qūčar に与えた伝言は以下のものである。
「お前たち二人は，私を殺して，黒い土の上に投げて放置しようと，あるいは土の下に隠そうと考えていた。以前，最初のときから，バルタン・バアトル Bartān Bahātur の子供たちとサチャ Sača とタイチュ Tāyjū に対して，「オノン Ūnān 河の我々の土地は，どうして主なしでよかろうか」と我々は言った。私はおおいに努力して，「お前たちが王にカン ẖān になれ」と言った。お前たちは承諾しなかった。私は困って，クチャルお前に「お前はネクン・タイシ Nekūn Tāyšī の息子だ。我々の中からお前がカンになれ」と私は言った。お前はならなかった。アルタンお前に「お前はクトゥラ・カン Qūtula Qān の息子で，彼は王であったから，今お前も王になれ」と私は言った。お前もならなかった。お前たちは私を過大評価して「お前がカン ẖān になれ」と言った。私はお前たちの言葉に従ってカン ẖān になった。「私は父祖の土地と家をぼろぼろのままにはせず，彼らの習慣とヨスンを無駄にはしない」と私は言った。「私が王になり，多くの地方で軍隊のリーダーになったとき，属する者との約束を守ることは義務である」と私は考えた。私は，人々の畜群，多くの家，妻子を略奪し，お前たちに与えた。私は，草原の獲物をお前たちのために先駆けし，巻狩りをした。私は，山の獲物をお前たちの側に駆った。お前たち，アルタンとクチャルの二人は，誰にも三河の源で下営をさせるな。」（『集史』チンギス・カン紀 Rašīd/Majlis 2294, fol. 77b; Rašīd/Узбекистан 1620, fol. 55b; Rašīd/Topkapı 1518, fol. 84a; Rašīd/Rawšan, p. 391）

時帝諸族按弾・火察児皆在汪罕左右。帝因遣阿里海詢責汪罕，就令告之曰「昔者吾国無主，以薛徹・太丑二人実我伯祖八剌哈之裔，欲立之。二人既已固辞，乃以汝火察児為伯父聶坤之子，又欲立之，汝又固辞。然事不可中輟，復以汝按弾為我祖忽都剌之子，又欲立之，汝又固辞。於是汝等推戴吾為之主，初豈我之本心哉，不自意相迫至於如此也。三河祖宗肇基之地，毋為他人所有。汝善事汪罕，汪罕性無常，遇我尚如此，況汝輩乎。我今去矣，我今去矣。」按弾等無一言。（『元史』巻 1「太祖本紀」）

時上族人火察児・按弾，在汪可汗軍中。上因使謂之曰，「汝二人欲殺我。将棄之乎，瘞之乎。吾嘗謂上輩八児哈抜都二子薛徹・大丑，『詎可使斡難河之地無主。』累譲為君，而不聴也。又謂火察児曰『以捏群大石之子，吾族中当立。』汝又不聴。又謂按弾曰『汝為

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

忽都剌可汗之子，以而父嘗為可汗推位。』汝又不聴。我悉曾譲，汝等不我聴。我之立，實汝等推也。吾所以不辞者，不欲蒿莱生久居之地，断木植通車之途，吾夙心也。假汝等為君，吾当前鋒，俘獲輜重，亦帰汝也。使我従諸君畋，我亦将遮獣迫崖，使汝得従便射也」。又謂按弾・火察児曰「三河之源，我祖實興。毋令他人居之。」（『聖武親征録』）

これらの記事は，共通する同一の情報に基づいて書かれていることは間違いなく，『元朝秘史』123節の記事は，チンギス・カンと名付けたと述べている部分は作者の創作であるが，カンに選出したこと自体は創作ではないことがわかる。従って，従来の大方の研究者の説どおり，テムジンがキヤト族の内部でカンに選出されたことは史実であると考えることができる。ただし，『元朝秘史』のストーリー，すなわちジャムカとの決裂後，ジャムカの配下の集団が離れてテムジンの配下に加わり，その結果テムジンがカンに即位されたというストーリーそのものが史実であるかどうかは疑わしい。キヤト族内部で推されてカンになったという事実を，巧みに脚色してストーリーを作っている可能性があり，テムジンがいつどのような状況でカンに選ばれたかについては，今後慎重に分析する必要があろう。

6. おわりに

即位前後までのチンギス・カンの前半生に関する従来の研究において，混乱を招く原因となっていたのは『元朝秘史』の記述である。そのため，本稿では『元朝秘史』の記述が，史実をもとにどのように巧みに改変・脚色されているかを，事例をあげて示してみた。『元朝秘史』の作者の目的は，史実を忠実に記すことよりも，建国の英雄チンギス・カンをよりよく語ることにある。その点では極めてよくできた作品であり，多くの研究者が『元朝秘史』の作者の意図にはまってしまい，実際のチンギス・カンより良いイメージで捉えてきたことは否めない。今回は，チンギス・カン家の養子，テブ・テンゲリ殺害事件という二つのトピックを取り上げ，事実は『集史』に記されていることを示した。ただし，『元朝秘史』と『集史』の記述が異なる場合に，直ちに『元朝秘史』が誤りであるとは限らないことを示すために，チンギス・カンの第一次即位を最後にとりあげた。チンギス・カン前半生の全貌の解明はまだ残された課題であり，確かな史実は何かを再確認していくことからチンギス・カン伝の再構築が可能となるであろう。

≪『集史』校訂テキスト・写本一覧≫

Rašīd/Али-заде 1-1：А.А.Али-заде（ed.），*Фазлаллах Рашид ад-Дин, Джами ат-Таварих*. Том I, Часть 1,

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

Москва, 1965.
Rašīd/Rawšan：M. Rawšan & M. Mūsawī（ed.）, *Jāmi‘ al-Tawārīḫ*, 4 vols., Tehran, 1373/1994.
Rašīd/Majlis 2294：イスラム議会図書館 Kitābḫāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, MS. 2294.
Rašīd/Узбекистан 1620：ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 Институт Востоковедения Академии Наук Республики Узбекистан（Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies）, Ташкент, MS. 1620.
Rašīd/Topkapı 1518：トプカプ・サライ博物館付属図書館 Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, MS. Rewān köşkü 1518.

≪参 考 文 献≫

1. 欧米諸語文献

Allsen, Thomas
1994 “The Rise of the Mongolian Empire and Mongolian Rule in North China”, Herbert Franke and Denis Twitchett（ed.）, *The Cambridge History of China vol. 6: Alien Regimes and Border States, 907–1368*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 321–413.
Biran, Michal
2007 *Chinggis Khan*, Oxford: Oneworld Publications.
Grousset, R
1944 *Le conquérant du monde*, Paris. 邦訳：グルッセ1967.
Hambis, L
1973 *Gengis-Khan*, Paris. 邦訳：アンビス1974.
de Hartog, Leo
1989 *Genghis Khan*, London: I. B. Tauris. 邦訳：ハルトフ1991.
Lane, George
2004 *Genghis Khan and Mongol Rule*, Westport: Greenwood Press.
2006 *Daily Life in the Mongol Empire*, Westport: Greenwood Press.
Man, John
2004 *Genghis Khan: Life, Death and Resurrection*, New York: St. Martin’s Press. 邦訳：マン2006.
Morgan, David
1986 *The Mongols*, Oxford: Basil Blackwell. 邦訳：モーガン1993.
Okada Hidehiro
1969 “Yuan Ch’ao Pi Shih, a pseudo-historical novel”,『第三届東亜阿爾泰学会会議記録』／*Proceedings of the Third East Asian Altaistic Conference*, 国立台湾大学, 台北, pp. 194–205.
1972 “The Secret History of the Mongols, a pseudo-historical novel”,『アジア・アフリカ言語文化研究』5, pp. 61–67.
Pelliot, P. et Hambis, L.
1951 *Histoire des Campagnes de Gengis Khan*, Leiden.
Ratchnevsky, Paul
1965 “Šigi-qutuqu, ein mongolischer Gefolgsmann im 12.-13. Jahrfundert”, *Central Asiatic Journal*, 10, pp. 88–120.
1983 *Činggis-khan, sein Leben und Wirken*, Wiesbaden. 英訳：Ratchnevsky 1991.
1991 *Genghis Khan: His Life and Legacy*, Oxford: Basil Blackwell.
1993 “Šigi Qutuqu（ca. 1180–ca. 1260）”, I. de Rachewiltz（ed.）, *In the Service of the Khan*, Wiesbaden, pp. 75–94.
Togan, İsenbike
1998 *Flexibility and Limitation in Steppe Formations: The Kerait Khanate and Chinggis Khan*, Leiden: Brill.
Weatherford, Jack

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

2004 *Genghis Khan and the Making of the Modern World*, New York, 邦訳：ウェザーフォード 2006.
Yoshida Jun'ichi,
1992 "On the battle of Köyiten", *Olon Ulsyn Mongol Erdemtniy V ikh khural 1 bot*, Olon Ulsyn Mongol Sudalyn Kholboo, Ulaanbaatar, pp. 400–404.
Владимирцов, Б.Я.
1922 *Чингис-хан*, Петроград, Москва, Берлин.

2. 日本語・中国語文献

アンビス，ルイ
1974 『ジンギスカン』（クセジュ文庫），白水社。
ウェザーフォード，ジャック
2006 『パックス・モンゴリカ：チンギス・ハンがつくった新世界』日本放送出版協会。
宇野伸浩
1991 「根本史料を比較する 英雄の偉業を伝える『秘史』と『集史』」『草原の英雄"蒼き狼"の覇業』（歴史群像シリーズ25号；チンギス・ハーン上巻），学習研究社，pp. 182–185.
1993 「モンゴルにおける文字文化の発生と『元朝秘史』」『史滴』14, pp. 50–54.
2008 「チンギス・カン前半生研究のための『元朝秘史』と『集史』の比較考察」松田孝一（編）2008, pp. 117–135.
ウラジーミルツォフ
1942 『チンギス・ハン伝』生活社。
岡田英弘
1970 「チンギス・ハーン崇拝とモンゴル文学」『歴史と地理』182.
1971 「チンギス・ハーン崇拝とモンゴル文学」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』14, p. 35.
1981 「モンゴルの統一」『北アジア史（新版）』護雅夫・神田信夫編　山川出版社，pp. 135–182。
1986 『チンギス・ハーン』（中国の英傑９）集英社。再版：『チンギス・ハーン』（朝日文庫660）朝日新聞社，1993年。
小沢重男
1986 『元朝秘史全釈（下）』風間書房。
1987 『元朝秘史全釈続攷（上）』風間書房。
北川誠一
1984 「西アジア史料に見えるチンギス＝ハンの統治権神授説について」『北方文化研究』16, pp. 43–67.
栗林均・碉精扎布（編）
2001 『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（東北アジア研究センター叢書第４号）東北大学東北アジア研究センター。
グルッセ，ルネ
1967 『ジンギス汗――世界の征服者――』角川書店。
小林高四郎
1936 「成吉思汗生母再婚説の否定――Ecige なる称謂を中心として」『善隣協会調査月報』48, pp. 47–53.
1960 『ジンギスカン』（岩波新書372）岩波書店。
佐藤正衞
2006 『チンギス・カンの源流』明石書店。
白石典之
2001 『チンギス＝カンの考古学』同成社。
2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社。
2006 『チンギス・カン："蒼き狼"の実像』（中公新書1828）中央公論社。
白石典之（編）
2006 『モンゴル国所在の金代碑文遺跡の研究』（平成16～17年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書）。
杉山正明
1992 『大モンゴルの世界――陸と海の巨大帝国』（角川選書227）角川書店。

NII-Electronic Library Service

Hiroshima Shudo University

1997 「はるかなる大モンゴル帝国」杉山正明・北川誠一『大モンゴルの時代』（世界の歴史９）中央公論社, pp. 9–290.
2005 『疾駆する草原の征服者』（中国の歴史08）講談社。
2008 『モンゴル帝国と長いその後』（興亡の世界史09）講談社。
ハルトフ，レオ・デ
1991 『チンギス・ハーン――世界の征服王』心交社。
松田孝一
2006 「セルベン・ハールガ漢字銘文とオルジャ河の戦い」白石典之（編）2006, pp. 28–50.
松田孝一（編）
2008 『内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する研究』（平成17～19年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書）。
マン，ジョン
2006 『チンギス・ハン：その生涯，死，そして復活』東京書籍。
村上正二
1970 『モンゴル秘史１』（東洋文庫163）平凡社。
1972 『モンゴル秘史２』（東洋文庫209）平凡社。
モーガン
1993 『モンゴル帝国の歴史』（角川選書234）角川書店。
吉田順一
1968 「元朝秘史の歴史性――その年代記的側面の検討」『史観』78, pp. 40–56.
1986 「タイチウト部衆の来属――『聖武親聖録』・『集史』・『元史』太祖本紀の比較検討」『アジア史における年代記の研究』（文部省科学研究費研究成果報告書），pp. 62–72.
1993 「テムジンとオン＝カンの後期の関係――父子を言い交わしたという伝承の分析」『蒙古史研究』4, pp. 11–24.
1996 「テムジンとオン＝カンの前期の関係――二人の父子関係についての伝承の分析」南京大学元史研究室編『内陸亜洲歴史文化研究――韓儒林先生紀年論文集』南京：南京大学出版社，pp. 21–48.
2005 『『蒙古秘史』研究（“Mongγul-un niγuca tobciyan”-u sudulul）』北京：民族出版社。
余大鈞
2002 『一代天驕成吉思汗：伝記与研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

NII-Electronic Library Service